
ドイツさんと私

タナカハナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドイツさんと私

【Nコード】

N0649Z

【作者名】

タナカハナ

【あらすじ】

見た目小学生のOL鈴木麦子が家に帰ると、そこにはなぜかゴリラのようなドイツ人。どこかすつとぼけた日本語を話すドイツ人と、文字通りの意味で振り回される麦子との恋愛とビールと何かの日々。実際の人物とはまったく関係ありません。ドイツ語は適当です。全4話

玄関にゴリラ

ある日、家に帰るとゴリラがいた。

しかも、うちの玄関ポーチ。仕事柄目を使いすぎたのかな、と思
って擦ってみても、そのゴリラは一向に消えない。消えないどころ
か、すごい存在感を発している。

目算で身長二メートル弱。清潔感のある白いシャツからちらりと
見える腕には、むきむきの筋肉。

ん？ 白いシャツ？

どうしてゴリラがシャツなんか着ちゃってるんだろう、と近くに
寄ってみる。すると、私のその気配に気がついたのか、それはくる
りと振り返った。

「コンバンハ！」

しゃ、しゃべったあああ！

どこぞで目にしたCMかくや、というテンションで、私は口を開
いたそれを見上げる。

ポーチに取り付けられた暖色の灯りの下、きらきらと光る金色の
髪。私を見詰める瞳は綺麗な青色。

つまり、ゴリラはゴリラではなく、ただのかい外人だったのだ。

「こ、こんばん、は？」

だがしかし、なぜこの巨大な外国人がうちの前に居座っているの
か、という疑問はまだ解消されていない。

ものすごく威圧感のあるその顔を見上げながら、とりあえず私は

当たり障りない挨拶を返す。そして、じりじりと警戒心を露わにし
ながら玄関へと歩み寄った。うお、近くで見るとさらに巨大！

「隣に、来ました。オミヤゲ？」

なんで最後に疑問型、と心の中で軽く突っ込みつつ、外人が差し
出すそれに視線を落とすと。

なんとということでしょう！

どこかの番組ナレーションのような感想が、頭の中を駆けめぐつ
た。外人が手にしているのは、あきらかにワイン。しかも、白。そ
してドイツ産。

一瞬にしてそれだけの情報を読みとった私は、自然とにやける顔
を直しつつ、差し出されたそれをうやうやしい仕草で受け取る。

「わざわざご丁寧に、ありがとうございます」

よそ行きの顔で笑ってみせると、なぜか外人はその白い頬をうつ
すらと染めた。顔とがたいに似合わず、照れ屋らしい。

にしても、でかい。近くで見れば見るほど、遠近感が狂う。

鍛え上げられた体躯はよけいなもの一切ついていない筋肉質。

それはボディビルダーのような不自然なものではなく、どちらかと
いえば軍人さんのような、持久力ありますって感じの付き方。私の
好みだ。

その上に乗っかっている顔も、いかにも外国人ですっていう彫り
の深さ。整ってはいるのだけれど、いかつさが全面に出ているため、
これ絶対子供泣くよなっていう仕上がり。もったいないなあ。

薄い金色の髪は短く整えられ、青い瞳が少し柔らかく私を見つめ
ていた。

ん？ そっいえばなんで見つめ合ってるわけ？

「あのう、ええつと……」

「オリヴァーです。オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトックです。ドイツから来ました」

「オリヴァー、さん？」

「オリーのフロインドウ、オリーと呼びます」

フロインドウってなんだよ、ドイツ人。

よくわからないけど、とりあえず笑つとけ、と再びよそ行き笑顔をむけると、ドイツ人も今度は満面の笑みで答える。ただし、顔は怖い。

それが、私　鈴木^{すずき}麦子と隣のドイツ人、オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトックとの初遭遇だった。

引越しの挨拶にいただいたワインは、さすがドイツ産。

甘くて、スパークリングで、めっちゃうまかった。あんまし誉められたことではないが、近くのスーパーで同じ銘柄の値段を見ても、そこそこいいお値段。ダンケ、ドイツ人！

両親はともにアルコールを摂取しない人たちなので、二本あったそれはすべて私の胃の中に消えた。

小さなコップ半分のビールでも酔っぱらう両親から、どうしてこんな酒豪が生まれたのかはわからないが、ただで飲む酒ほどうまいものはないね！

現金にも、そんなことでお隣さんを敬っていた私だったのだが。

「オカエリナサイ！　夕飯はおでんです」

なぜそのドイツ人がうちにいる！

会社から帰って玄関に入ったら、いきなり壁があった。というか、壁だと思ったら、件のドイツ人だった。

見慣れた玄関が、すんごく小さく見えるのは私の目の錯覚じゃないと思う。

品のいいグレイのシャツと黒いスラックスに身を包んだドイツ人は、私からの返答を待っているのか、にこにこしたまま動かない。いや狭い、狭いから。

「た、ただいま？」

「今日、ドイツのビール持ってきましたよ。コムギ、ビア好きですよ」

好きですかって訊いてよ、そこは。まあ、間違っではないけれどもさあ。ていうか、ドイツ産？ ドイツ産のビールって言ったか、今！

いやいや待て待て、落ち着け私。その前に正すべきことがひとつあつたぞ、ドイツ人。

「コムギってなに、コムギって。私は麦子！」

「ムギコはコムギ。ムツタア、オリーにコムギいいよって」

確実に五十センチは上にある理性的なゴリラ顔を睨み付けると、ドイツ人はいたずらを怒られたような表情をして、たどたどしく弁解する。

えらい低音のいい声でんなしゃべり方されると、殴りたくなくなるくらいに可愛いじゃないか。

というのはいいとして。

「つまり、お母さんがオリーに『麦子のことはコムギって呼んでいいのよ』なんて勝手なことをぬかしやがったと。そういうことでオーケー？」

「Ja！」

あの天然母がよけいなことを！

ただでさえ低身長に童顔のこの外見のせいで、不当な扱いを社会から受けているというのに。できれば、正しく「麦子さん」と呼んでいただきたい！

二十五歳の淑女らしく扱ってもらいたいんだよ、無理っぽいけどね、すでに。きょとんとしてこちらを見ているドイツ人に、私は大きくため息をつく。ここは気を取り直して！

「オリー、おでんは初めてなの？」

「初めてです。ムツタア、オリーのうち来て、入れて言いました。オリーはとても嬉しゅうございます」

なぜ最後だけそうなる。

吹き出すのをこらえ、目をキラキラさせるドイツ人を従えてダイニングへと移動。本国にいる時、知り合いの日本人と日本映画で言葉を学んだという彼は、時々面白い言葉遣いをする。あえて、訂正はしない。

部屋に入ると、母はテーブルにおでん鍋をセッティングしているところだった。冬はこれこれ、これだよねえ。

あ、そういう重要なことをさっき聞いた気がする。

「ドイツビールあるって？」

「あら、おかえりなさい。オリーちゃん、誘っちゃったあ」

「ああ、うん。今さら言われなくてもすごい存在感あるしね」

私と母のやり取りをにこにこしながら見ているドイツ人は、やっぱりいいかい。

これで「悪い子いねがあ！」って来たら、なまはげに勝てる。ぶっちぎりだ。

「コムギ、ビアはここです。オリーのダチ、送ってくれたよー」

「おっ、オリー、すっかり『ダチ』をマスターしたね」

「した！」

誉めて伸ばす。うん、成功成功。

初めて会った時にドイツ人が言っていた『フロインドウ』ってのがわからず、辞書を引いた私。それが日本語で言うところの『友達』だとわかって、斜め上に教えました。いいんだ、『ダチ』って格好いいし。

まるで忠実な大型犬種のように、できたできたと喜ぶドイツ人の腹を、よしよしと撫でてやる。できれば頭を撫でてやりたいところだけれど、悲しいことに私の手が届くのは腹あたりまでだった。屈辱！

それをくすぐったそうに受けていたドイツ人。何を思ったのかそのでっかく厚い手で、お返しとばかりに私の頭を撫で回してきた。ちよ、やめ、首が首ががくがくするから！

「あああ、仲良し！ 素敵ねえ」

「お母さんっ、止めてっ！ 止めてよ、私死ぬから！ 頸椎けいついやられて死んでしまうから！」

「コムギ、バカかわいいですねえ」

「いやそれ嬉しくないから。全然嬉しくないかねっ！？」

なんとかその手の下から抜け出した私は、とにかくまずは着替えしてくる、と慌てて自分の部屋へと一時避難したのだった。

おでんとすき焼きとソーセージ

「いただきまーす！」

部屋着に着替えた私が食卓につくと同時に、三人手を合わせて鍋に一礼。ちなみに、部屋着がユニクロの子供用だということは、私だけの秘密だ。

さっそくビールに手を伸ばす私を、それを持ってきたドイツ人は嬉しそうに見ている。

「コムギはドイツ人の人みたいですね」

「まあ、負けないくらいにビール好きなのことは認めるよ」

日本人がドイツドイツと呼ぶ国は、本来は『ドイチュランド』と発音するらしい。

このムキムキのドイツ人が、『ドイチュ』と口にする様は、激しく可愛い。チュっってもう、ねえ？

そのドイツ人も持参した馬鹿でかいジョッキでぐびり、とビールに口をつけた。彼が言うにはこれが普通サイズとのことだが……あなどれんな、ドイツ！

にしても、うまい。

ワインに引き続き、これだって輸入食品を扱う店に行けば、けっこうな値段するぞう。しかもわざわざ本国から送ってきたって。もしかして、金持ち？

ちくわぶの熱さに、はふはふ言いながら涙目になっているドイツ人を横目で見てみると、何を思ったのか新しくビールを開けて差し出される。

そうかそうか、あんたの中では私はそういう生き物か。よし、ありがたくいただく。

「妻子ったらあ。本当に、誰に似たのかしらねえ。こんなちっちゃいのに、そんなにどこに入っていくのかしら」

「ちっさい言わないっ」

「コムギ、バカ可愛いですよ」

「フォローになってないっ」

お客様の中に、ツツコミの方はいらっしやいませんか！と叫び出したくなるような惨状に、今はここにいない父の存在を思う。が、よく考えれば気の優しい父は常識人ではあるが、天然おっとりの母にさえツツコミをいれられない人なのであった。

しかたなく、昆布を口に放り込みながら考える。ここは話題転換を要求しよう。うん、それがいい。

「ねえ、オリーは日本でなにやってる人なの？」

なぜかおでん鍋の中に入っているソーセージを箸で器用につまみながら、ドイツ人は私の問いかけにこちらを見る。ドイツ人とソーセージ。絵的には間違ってるない。

どうせ母が『ドイツソーセージ』くらいの短絡的な勢いで、普段は入れないそれをぶちこんだということだろう。味は悪くはないけどさ。

「オリーは、守る人です」

「守る人？ なにそれ、何から？」

なぜか甲斐甲斐しく手渡された三本目のビールを飲みながら、私は首を傾げる。

ていうか、おまえは私の嫁さんか。ふたまで丁寧に開けてくれるから、私は飲むだけ。それでいいのか、ドイツ人！

「タマが飛んでくる。オリーはそれから、守る人です。仲間に指示します。怒ります。蹴り返して、仲間助けます」

うええええ。なにその危険なお仕事。

そのがたいからして、どうやっても堅気のお人じゃないとは思ってたけれど、それはつまり。

「まあ、かつこいつ。SPねっ、SPなのねえっ」

「SP？ オリー、GKですよ？」

「ドイツではそう言うのかしら？ 身体をはるお仕事なのねえ」

もつと食べなさい、と何やら感激しきりの母が、ドイツ人の皿に大根やらはんぺんやらを特盛りにする。

SPかどうかはともかく、このドイツ人が何かの警備員らしいってことはわかった。

見た目はともかく、意外と細やかで優しい彼がそんな荒事を生業にしているとは、意外である。怒るところなんて、想像もつかないけれどねえ。

見慣れてくると多少可愛く感じられるその笑顔を見つめていると、何を思ったのかドイツ人、今度は袋の中からワインを取りだしてみせた。

「ヴァイスヴァイン？」

「オリーは私を正しく誤解しているよ！ いただきますっ」

文句は忘れず、しかし私は素早く立ち上がって食器棚からワイングラスを二脚取りだし、目の前に置く。

心得ているとばかりに見事な所作で手早くコルクを抜いたドイツ人が、なみなみとそれに淡い金色の液体を注ぎ、私たち二人は気分良く杯を持ち上げた。

「こういう時、ドイツではなんて言うの？」

「プロースト！」

嬉しそうにそう言う彼につられて、私も思わずにっこりと笑う。

「プロースト！」

そんなこんなで始まった、いかついドイツ人とのご近所付き合い。その私たちふたりは今、なぜか近所のスーパーで一緒に買い物なんかをしまっている。

しかも、まるで恋人のように手まで繋いでいる。な、なぜ？

隣で口笛を吹いてご機嫌なドイツ人を恐る恐る見上げると、それに気がついた彼はますますその笑顔をきらめかせた。

「こらこら、そこらの子供さんが顔を引きつらせていますよ、ドイツ産なまはげに。」

「ムッタアが、今日はスキヤキですよ。お買い物、行って来い！」

「オリー、スキヤキの歌、歌います？」

「歌わんでいい、てかスキヤキの歌ってなんぞ！」

ぶんぶんと繋いだ手を振るドイツ人に、私は文字通り振り回される。やめれ！

合わさった手のひらの大きさもそうだが、歩幅もずいぶん違うはずなのに、気がつけばドイツ人は私に合わせて歩いていてくれた。

それに気付いて、なんとなくそわそわする。この小学生的外見から、今まで学校や会社ではさんざん子供扱いはされてきた。けれど、こういう風に女の子扱いされたことはない。欧州的エスコート術なのか!?

しかし、所詮はゴリラと見た目小学生。スーパーに入ったときから、周りの目が痛い。

なんていうか、「あれは親子?」「いや、違うでしょう」「みたいな会話がね、背中から聞こえてくるわけですよ。

うう、早くお買い物すませて返ろう。

「ええつとオリー、野菜から行くよー……っておい！ 何してんの！」

渡された買い物メモを見ていた私がそう言って、静かになった隣を見てみれば、店内で目立ちに目立ちまくっているドイツ人の姿はソーセージコーナーの前。お前はパブロフの犬かつ！

慌ててそちらに近寄って行くと、その気配を感じて振り返ったドイツ人の瞳がすっごく輝いている。もう眩しいくらいの青い瞳。

「コムギ！ これ素敵ですね！ ゲートウシエーン！」

「はあ？」

野球のグローブかと思えるほどにでかいその右手に握られていたのは、まさかの子供用ソーセージ。魚肉。しかも、戦隊もの。

まだ隣の子向け魔法少女にひかれなかっただけ、マシなのか？

「これ、カコイイ！ コムギ、買って！ 買って！」

「どこのお子様なのよ……」

ものすごい勢いでアピールしてくるドイツ人に呆れた視線を送るが、当人はどこ吹く風でこちらに迫る。だから、遠近感狂うからそんなに近付くなって。

「そんなの、高い割には中身があんまし入ってないし、却下」

「悲しゅうございますよ！ オリーはこれが必要なものだと考えます。素晴らしいデザイン、オリジネル！ 中には四つ。ファータア、ムッタア、コムギにオリー。最高です。仲良しの証ですね！ いかがですか？」

「いかがですもなにも」

あなたはなぜスーパーのソーセージコーナーで、とどろく美声を使って演説なんかを始めちゃったりしているんですか、と小一時間こっちが問いつめたいわ。

さっきまでは怖いもの見たさだったお客さん達が、あまりのくだらないこのやり取りに、くすくすと笑い声を漏らしている。

期待に満ちた顔でつきだされたそれを受け取るかどうか迷っていると、くいつと服の裾を誰かに引かれた。

驚いてそちらを見れば、小学生低学年の男の子がひとり。何だかしたり顔で私を見詰めている。

「姉ちゃん、買ってやれよ。可哀想だろうが！」

哀れむような瞳を向けられたドイツ人は、わかっているんだかわかってないんだか、思わぬ援護射撃に大きく頷いた。なにこれ、私悪もんくさくない？

頼んだぞ、となぜか偉そうに言い置いて、同じソーセージを掴んだ男の子は、先で待つ母親のもとに走っていく。た、頼まれてもな

あ。

「コムギ……」

「あーもう、わかった！ ひとつね、ひとつだけだからねっ」

やけになつてそう叫ぶと、オリーはぱつと顔を輝かせ、突然私の身体をぎゅうつと抱き込む。ええええ。

大きな背中を折り曲げて私を胸の中に閉じこめると、頭のてっぺんに頬をすりすりとしり寄せてきた。

ちよ、ちよ、ちよ！ あの、なんか心なしか私の身体、地面から浮いてますよね！？

「Ich liebe Dich、コムギ……」

「わわわわかった、よくわかんないけどわかったからっ」

「Sei doch immer bei mir nahe zum Greifen……」

ええい、何を言っているのかわからん！ ジャパニーズプリーズ！

ドイツ人はじたばたと暴れる私の身体をそつと離すと、少しだけ頬を染めて微笑む。その青い瞳がなんだか熱っぽく私を見つめるのは、なんでだろう？

呼吸的な意味で真っ赤になった私に、再びそのいかつい顔が近づいて、そして。

ちゅっ。

鈴木麦子二十五歳、初めてのキスは近所のスーパー。しかも、ソーセイジコーナーの前でした。

日独同盟破棄!?

「日独同盟を破棄したい。切実に、ものすごく!」

日本酒の入ったコップを割れない程度にがつん、とこたつの天版に叩きつけ、私は隣に座るでかい生き物を睨み付けた。

ダイニングから続く居間、テレビの前のこたつにて。なぜか満足げな顔をしたドイツ人は、心得たように私のコップにお酒をつぎ足している。いや、間違っただけじゃないけどそうじゃないっ。

「みかん、おいしいですね」

「田舎からの直送だぞ、当然! ……じゃなくて、ちょっと近いっ」

そもそもこたつって四面あるじゃないの。どうしてわざわざ隣に座るのかなあ!?

しかも、無理矢理隣に身体を押し込んできたドイツ人は、ぎゅうぎゅうと私に寄ってくる。おいこら、懐くんじゃないっ。

「狭いつ! オリーはあつちに座ってっ」

「狭い? オリーは狭くないですよ?」

でっかい手でちまちまとみかんの皮をむくドイツ人は、私の言うことがまったくわからないとでもいうように、こつと首を傾げてみせた。か、可愛くなんかないんだからねっ。

「誰があんたの意見を訊いた! 私が狭いのっ。潰れるのっ」

その言葉にドイツ人は大きく頷くと、むき終わつたみかんを黙つてこちらに差し出した。反射的にそれを受け取ると、私はなぜかそのまま彼に抱き上げられてしまう。ええええええええ!

両脇に差し込まれた大きな手のひら。それがふわつと私の身体をいとも簡単に持ち上げる。そうして自分の足の間へと私を降ろし、そのごつつい腕が腹にぎゅっとまわつて、拘束完了。

「これでコムギ、狭くないですね?」

「ばばばばばば」

あまりのことに、罵声さえ出てこない。

それをいいことに、ドイツ人は私の耳にやたら可愛らしいリップ音を響かせてキスをした。なんだこれなんだこれなんだこれ。

そして、匂いを嗅ぐように首筋にその高い鼻を埋められたところで、私はギブアップ。あくあく和白いタオルを求めて、ちょうど追加のみかんを持ってキッチンから戻ってきた母に、必死に手を伸ばす。れ、レフリーー!

「あらあ、素敵! 昔のお父さんと私を見てるみたいっ」

「娘の貞操の危機だつつの! ここは怒るところだから! ボケるところじゃないからっ」

「えー? だって、ハーフの赤ちゃんて天使みたいでいいわよねえ?」

「オリー、頑張りまするよ!」

「あんたは余計なところに参戦すんなっ」

首にキスしてくるドイツ人を、手のひらで押しのけて、私は叫ぶ。するとそれ以上のことはせず、彼はとろけるように甘い笑みを私に向けた。自然と自分の顔が赤くなるのがわかる。く、悔しい。

「に、日本酒、おかわりっ」
「Ja！」

あのあと、なんでか客室にお泊まりしていたドイツ人に私が叩き起こされたのは、次の日の朝。日曜日の七時三十分。正気の沙汰とは思えない。私の日曜日を返してよう！

ていうか、未婚女性の寝室に勝手に入ってくるって、あんたの国は騎士の国だろうがっ。

「コムギ、早く早く。始まりますよ！」

「ううう、何がよ……？ って、ちよ、抱き上げるなっ」

何かそわそわしているなと思っていたら、なかなか起きあがらない私に焦れたドイツ人は力業に訴えた。

つまり、パジャマ姿の私をベットから抱き上げ、そのまま階段を下りて居間へと向かう暴挙に出たのだ。小学生体型とはいえそれなりに重いはずの私を抱えても、ちっとも危なげのない足取り。素早くテレビの前までやってくると、こたつの中に私を押し込んだ。

そして、キッチンからオレンジジュースを持ってきて私に渡す。そのまま当然のように私を背後から抱き締め、彼もこたつへと足を伸ばした。待て、この位置はもう決定なんですか。

寝起きの頭に次々と浮かぶ疑問は、あわあわという不明瞭な言葉でしか出てこない。そんなことにおかまいなし。ぷちん、という音とともにテレビを点けると、ドイツ人は私の頭を顎でぐりぐりと撫でてきた。

痛い痛い痛いってばっ。

「ソーセージ、始まりますね」
「意味がわからない！」

画面を太い指でさすドイツ人に不機嫌を伝えつつ、私はオレンジジュースを一口飲む。気遣いのできるいい人ではあるんだよ。ちょっと斜め上に行きがちだけど。

まだ眠気の取れない目をごしごしと擦っていると、どこから出てきたんだか、まだほかほかしている濡れタオルで顔を拭われた。なんか、介護？

少しずつ覚醒していく頭の隅でそんなことを考えていると、目尻にちゅつとキスされる。

ゆ、油断も隙もあったもんじゃないね！

「ほら、コムギ！」

赤くなった頬を誤魔化すように首を振った私に、妙にはずんだ声でドイツ人が再び話しかけた。だから、なにがどうしてなんだというの！

促されるまま、仕方なくテレビに目をやった私がそこで見たものは。

『あーいーとーゆーうきー！ かかゲーとーゆくーんーだー！ ライオンジャー！』

……ああ、ソーセージ。うん、ソーセージね……。

何が悲しくて二十五歳独身女性が、三十五歳ドイツ人と一緒に日曜の朝から戦隊ヒーローを見なければならぬのか。

そんな疑問に思いつきり脱力してしまった私は、背後にある広い胸に背を預け、大きくため息をついた。その行動に何を勘違いした

んだか、より密着してきたドイツ人は、ライオンジャーについて一
所懸命説明をしてくれる。

「ライオンジャー、悪いと戦います。レックヒトウントフライハイト
！」

「うんうん、はいはい。ライオンジャー、かつこいいねっ」

いい加減あきれて適当にそう返すと、ドイツ人はなぜか一転、悲
しそうな顔になる。

まるでジャーマンシェパードがご主人に叱られて、耳と尻尾を垂
らしているが如く。あれ、でも今私、ちゃんと同意したでしょうが。
何が不満じゃっ。

「オリーとライオンジャー、どっち？」

「は？」

「オリーとライオンジャー、どっちが素敵ですか？ どっちを愛し
ていますか？」

ええええええええ。そういう話なの！？

口元は微笑んでいるけど、真っ青なその目がまったく笑ってない。
顔怖い、顔が怖いよ。

どう答えればこの地獄から抜け出せるっていうのっ。

「コムギ！」

ええいつ。

迫り来る悪鬼の如き顔に耐えきれず、私は思わずぎゅっとその首
に腕を回した。しかし、太い首に身体だ。膝立ちになって両腕を回
しているというのに、私では彼の身体を抱き締めきれない。

その鍛え上げられた固い身体の感触に、走り込みと筋トレを趣味

とする私はつい感動してしまった。胸板厚いなあ！

すると突然、強い力で抱き締め返される。ぐあああつ。さばおりっ、さばおりになつてゐるってえ！

「ラブ注入！」

「どこで覚えてそんな言葉ーっ！ ていつか出ちゃうっ、内蔵が出ちゃうっ」

「コムギ、Moechtest du meine Frau werden!？」

「くくく、苦しいっば！ もうっ、わかった、わかったっばああああ！」

その後さんざん締め付けられてぐったりした私の顔に、ちゅっちゅとキスを降らせたドイツ人は、朝ご飯までしっかり食べて自分の家へと帰って行った。

この時、自分が何に同意してしまったのか、私はまだ知らない。なんていうか、ドイツ語なんて嫌いだっ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0649z/>

ドイツさんと私

2011年12月4日01時51分発行